

< 書評論文 > 若林幹夫著『都市のアレゴリー』 『都市の比較社会学 - 都市はなぜ都市であるのか』

著者	菊池 哲彦
雑誌名	年報筑波社会学
号	13
ページ	128-136
発行年	2001-10
URL	http://hdl.handle.net/2241/108052

年報筑波社会学 第13号 (2001), 128~136頁。

《書評論文》

若林 幹夫 著『都市のアレゴリー』

INAX 出版, 1999 年, 333 頁, 2000 円。

若林 幹夫 著『都市の比較社会学—都市はなぜ都市であるのか—』

岩波書店, 2000 年, 237 頁, 2500 円。

菊池 哲彦

同じ著者が書き上げた、社会のなかにおける「都市のあり方」について思考した二冊の書物。その中の一冊、『都市の比較社会学』（以下、『比較社会学』と略記）の「おわりに」のなかで著者自身が述べているように、この書物は、これに先立つもう一冊、『都市のアレゴリー』（以下、『アレゴリー』と略記）という書物と「都市や社会、空間を捉える基本的な視点や概念、論点を〔……〕共有している」（『比較社会学』234 頁）。しかし、それと同時に、この『比較社会学』という書物が、都市のあり方を「日本という社会における日常的な語法や感覚の延長線上」によって捉え、また『アレゴリー』とは別の語り口から捉えることによって「新しい眺望」を開こうとする試みであるということが著者自身によって明言されている（『比較社会学』234-235 頁）以上、これらの二冊はそれぞれ独自の語り方と射程を持つ別々の書物であることは間違いない。それぞれ独立した二冊の書物を限られた紙幅のなかで同時に論じるという課題は、評者にはいささか荷が重いのであるが、著者が感覚している都市のリアリティを導きの糸にして、これら二冊の書物を貫く、著者の「社会のなかにおける都市のあり方についての思考」について論じてみたいと思う。

『アレゴリー』の「あとがき」のなかで、著者は、彼自身の都市に関する思考を突き動かしているのが、都市という場所によって暴き出されてしまう社会をめぐる知の「不安」であると述べている（『アレゴリー』330 頁）。経験的・感覚的・身体的に身近で「リアル」なものでありながら、そこでは知的な営みによって組み立てられた「社会」がそのリアリティの輪郭を消失させていく場所としての都市。著者にとって、そうした相反する感覚が同時に浮上していることこそ都市のリアリティなのである。ところで、『比較社会学』の冒頭で、岡崎京子のマンガ『リパースエッジ』の一節が引かれる（『比較社会学』1-2 頁）。物語の舞台である大都市東京のなかのある街を提示するこの一節で示されているのは、主人

公たちがその街のなかで感じている、ひとびとの日常的な生が営まれる場としての街の姿と、書き割りのように遠景として望まれる都市という、異質なふたつの感覚の共存である。

マンガの主人公が感覚している、都市の風景の身近さと疎遠さという全く異質な感覚の共存と、著者が感覚している、都市の圧倒的なリアルさとそこでの社会というリアリティの不確かさの共存とは重なり合っている。そして、この感覚こそ、おそらくはマンガの主人公や著者だけが感覚している都市のリアリティではない。リアルさとその消失、身近さと疎遠さ。この相反する感覚の奇妙な共存こそ、近代以降に現れた都市のあり方を、それ以前の都市のあり方から決定的に分かつものだ。著者が、その都市をめぐる思考のなかで提起するのは、自らの都市のリアリティに根ざした、この「近代以降に現れた都市のあり方」が現代の社会のなかでどのような意味を持っているのかという問題である。しかし、著者は、ここでもうひとつの重要な問題を提起する。近代以降の都市のあり方と近代以前の都市のあり方に以上のような断絶がある。それにもかかわらず、われわれは社会のなかの特定の場所を依然として「都市」と呼び続けている。そのあり方に歴史的な変容を被っていないながら、われわれがそれを「都市」と呼び続けられるのはなぜか。

われわれが「都市」と呼び続けている場所。しかし、そのあり方は、近代を境にして決定的な変容を被っている。著者の都市のあり方をめぐる思考は、都市が都市であることの深層的な構造と、それと関連する「社会のなかにおける都市のあり方」の変容というふたつの問題を中心に展開していくことになる。

こうした問題構成を考えると、ここでとりあげる二冊の書物において論じられているのが客観的な対象としての都市ではない、という点は重要である。つまり、ここで問われているのは、「都市とは何か（いかなるものであるのか）」という問題ではない。ここで一貫して問われているのは、「都市はなぜ都市であるのか」という問題である（この問いが『比較社会学』のサブタイトルに掲げられているのはまさに象徴的である）。この点は強調しておくべき点であろう。著者が問う「社会のなかにおける都市のあり方」とは、都市という存在を前提した上で記述されるその外延ではない。われわれが都市と呼ぶ存在の外延を記述しようとするとき、それはその歴史的・社会的多様性の前に挫折することになる。よしんば、都市という存在を定義しようような外延が見いだせたとしても、それはあくまでも「都市が都市であること」の結果である。たとえば、著者は、伝統的な都市社会学を代表するルイス・ワースによる「大量・高密度・高異質的な人口集団」という都市の社会学的定義は、都市が都市であることの結果として導かれることを指摘する（『アレゴリー』101頁、『比較社会学』11-12頁）。したがって、「都市はなぜ都市であるのか」という問いが扱うのは、そうした定義を帰結として導くような仕組み、いわば都市が都市として存在することを支える機制や論理なのだ。

そうして、著者の議論は、「すべての都市に共通しているただひとつのことは、それが一個の定住であるということである」というマックス・ヴェーバーによる都市の定義から出

発することになる。すべての定住が都市であるというわけではない。しかし、少なくとも、都市は定住である。ところで、ある土地が「定住である」ということが示しているのは、その土地が諸身体によって社会的協同連関のなかで共用され、そこが社会的な関係の場として構成されている、ということである。定住とは、このような協同連関を通して、ある空間が、単なる地理的なトポスとしてではなく、社会的な関係を構成する諸身体によって（現象学的な意味で）「住み込まれ」、社会的に有意義なものとして構成されることなのである。ある空間が、そこでさまざまな関係を織りなす諸身体の中にある種の社会性・共同性を帯び、社会的な現実として生きられるというあり方は、『アレゴリー』においてはヴェルター・ベンヤミンのアウラの概念をふまえて論じられ（『アレゴリー』45-53頁）、『比較社会学』においては〈社会の地形〉と名付けられている（『比較社会学』17頁）が、二冊の書物はこの空間のあり方の構造と様相を明らかにしようとしている。都市が定住である場合、ある土地空間が、社会的な協同連関を通して、都市という社会的現実として生きられ、〈社会の地形〉として構成されているのだ。ヴェーバーによる都市の定義を出発点とする意味はまさにここにある。定住として存在する都市、すなわち、都市という〈社会の地形〉を産出していく社会的な機制と、その構造やそこに内在する論理を明らかにするの試みとして著者の思考は開始されるのだ。『比較社会学』においては、そうした試みが〈社会の地理学〉と名付けられている（『比較社会学』22-23頁）。「都市はなぜ都市であるのか」という問いを、都市という〈社会の地形〉を成り立たせている機制や論理を明らかにする〈社会の地理学〉の試みであるという点で、『アレゴリー』と『比較社会学』というそれぞれ独立した書物は連続しているのである。

著者の都市のあり方をめぐる思考の出発点を確認したところで、都市が社会的なものとして構成される機制や論理を明らかにしていく都市論の試み——〈社会の地理学〉——について、その論理的な道筋をもう少し詳しく追っていくことにしよう。先に、著者の都市のあり方をめぐる問いが、都市が都市であることの深層的な構造と、それと関連する「社会のなかにおける都市のあり方」の変容というふたつの問題を中心に展開していくことを指摘しておいた。まず、都市の深層的な構造、いうなれば「都市の〈起源〉」——都市の歴史的起源とは区別されたその存在論的な起源——が明らかにされる。そして、その都市の〈起源〉が、社会的な協同連関を通して社会的現実としてひとびとに生きられる機制と論理、そしてそれらの歴史的変容へと展開していくことになる。

まず、都市の〈起源〉について。都市は、その〈起源〉において、土地に帰属するのではない。都市の〈起源〉、それは「交通・媒介の位相」である。都市は、特定の土地への帰属を前提とせず、都市内部のさまざまな集団・共同体、ならびにその外部のさまざまな集団・共同体、それらの横断する交通・媒介の位相をその中に保持している。それは、都市が交換ないし交通の結節点や中継点であるということの意味するだけでなく、都市がその

定住としての内部に、その前提として複数の場を横断する交通・媒介の位相を保持し続けているということである。こうした位相は、『アレゴリー』のなかでは、ヨーロッパ中世の都市共同体を例に挙げながら指摘される（『アレゴリー』54-60頁）。11世紀以降のヨーロッパにおける「商業の復活」は、当時のヨーロッパを覆っていた、土地を媒介とした保護と臣従を関係の原理とする封建社会の上に、土地に帰属せず、その上を横断するひとびとや物財の流通を生み出した。ヨーロッパ中世の経済都市は、こうしたひとびとや物財の流通の結節点・中継点としての商人たちの集住地が、宣誓による共同体の結成を通じて「自由」と「自治」を獲得したところに成立する。つまり、都市の物理的・制度的成立に先立って、ひとびとや物財の流通という交通・媒介の位相があったのである。都市の〈起源〉たる交通・媒介の位相は、ヨーロッパ中世都市を例に説明された経済的な領域のみにとどまらない。たとえば、宗教という領域で考えれば、宗教都市は、信仰の中心点・結節点として現れるのであり、そのなかに宗教に基づいた交通・媒介の位相を孕んでいる。この点については、『比較社会学』において、日本社会における都市の基本構造としての「都／鄙／町」の関係から交換・媒介の位相がより包括的に示される（『比較社会学』第一章）。ここでは、都／鄙の関係が、前者から後者への財・文化的価値・権力などの再分配、後者から前者への労働力・財・権力の集中という地理的な中心－周縁の関係に基づく集中－再分配関係である。それに対し、町は「鄙のなかの町」や「都のなかの町」という言葉が示しているように、そうした集中－再分配関係によってではなく、それらのあいだの交換によって人・物財・情報が行き来する、外部との交通へと開かれた空間である。こうした交換と交通の空間としての町が、それ自体として自立したのが「都市としての町」なのである。

著者は、このように、都市の存立を根源において支えているのは、土地空間の共有や共用に基づく共同体的な関係ではなく、そうした関係に先立って存在する、常に不特定多数の他者との関係に対して開かれた脱－共同体的・間－共同体的な交通・媒介関係であることを強調する。この、間－共同体的な不特定多数の交通・媒介関係に開かれた都市のあり方を、土地を媒介とした共同体的な関係としての〈土地的〉なあり方に対して、〈貨幣的〉な様相として捉えることができる。この比喻は、もちろん、都市において経済的な交換・交通関係が一般的に見いだされるということの意味するのではない。経済のみならず政治や宗教といった他の領域にいたるまで、都市の〈起源〉にある交通・媒介の位相は、都市のあり方を、共同体的な同一性へと閉じていくのではなく、間－共同体的な関係へと開いていく。その関係の外部への広がりを、貨幣が持つ、ローカルな共同体を越えて流通していく貨幣の「越境性」に重ね合わされて〈貨幣的〉と捉えられるのである。都市の〈起源〉とは、このように、共同体を横断的に結びつけていく〈貨幣的〉な交通・媒介の位相であり、それは「土地」という地理上の空間に帰属しない、まさしく〈場を占めぬもの（the atotopical）〉である。都市はその現象形態において土地空間上の場所を占める「定住」、あるいは定住的なものとして現れるが、それは一次的には間－共同体的な交通の空間として存

在しており、さまざまな社会的形象を媒介として、二次的に定住として現れているのである。都市とは、そのような意味で、定住としてのあり方に先行して、交通・媒介の位相という非定住的な位相をその内部に孕みながら存在している。

ところで、著者の議論の出発点を確定する上で既に確認したことだが、都市は、諸身体によって「住み込まれ」、社会的に有意義なものとして構成されることによって、生きられることによって社会的な空間として存在しうる。しかし、都市の深層的な構造である「交通・媒介の位相」は、まさに、〈場を占めぬもの〉であり〈語り得ぬもの (the atypical)〉であって、そういう意味で、諸身体が織りなす社会性・共同性の次元とは切り離されている。社会のなかに都市があるということは、この〈場を占めぬもの=語り得ぬもの〉としての都市の〈起源〉が、社会的に「生きられた」ものとして身体的な位相と結びついていくということである。この、お互いに別の次元にあるふたつの位相の結びつき方が、近代以前と近代以降で決定的に変容してきているというのが著者の議論である。

近代以前の都市のあり方からみてみよう。定住としての都市の現象形態は、〈場を占めぬもの〉である都市の交通・媒介としての位相が、さまざまな社会的形象を媒介として、土地空間上の一定の場所を占めることによって二次的に現れるという点は既に確認しておいた。近代以前の都市のあり方は、まさしく、都市の〈起源〉としての交通・媒介の位相を、土地空間上に投射するような社会的な協同連関が作用している。この社会的協同連関の作用によって、〈場を占めぬもの〉である交通・媒介の位相としての都市の〈起源〉は土地空間との社会的な結びつきを獲得する——土地空間のなかで一定の〈場所を占める〉——ことになる。この協同連関は、さまざまな社会的形象を媒介として作用し、都市の〈起源〉を土地へと結びつけ、〈社会の地形〉としての都市へと構成していく。〈場を占めぬもの〉である交通・媒介の位相が社会的協同連関を通して土地空間へと投射される諸様相の例として、『比較社会学』では、10 世紀後半から近世まで現在の静岡県磐田市付近に存在していた見付と呼ばれる都市がとりあげられる（『比較社会学』第二章）。ここでは、交通・媒介の位相としての〈場を占めぬもの〉が、土着共同体が信仰する神々、地名、墓地などといった社会的な形象を通して、土地空間のなかで生きられる歴史的な諸相が、詳細かつ豊かに記述されている。この見付の事例が示しているように、〈場を占めぬもの〉は、実践・制度・言説などの形式をとるさまざまな社会的形象を通して土地へと結びつけられ、土地空間上での共同体的同一性を保持するものとして構成されていく。こうした社会的形象として、『アレゴリー』や『比較社会学』の別の箇所でも、都市創造の神話や歴史の物語、都市祭礼のような儀式、コスモロジーや地図といった図像、都市計画やモニュメントなどの都市空間の建築的造形やその解釈といった例が挙げられている（『アレゴリー』69-72 頁、134-142 頁、『比較社会学』第三章）。こうした社会的形象をメディアとして、〈場を占めぬもの〉は都市空間上に物質的かつ記号的に表現され——土地空間上に一定の場所を占め——、それを通して都市の〈起源〉としての交通・媒介の位相が、諸身体が構成する社会

的協同連関のなかで共同体として想像・構想され、〈社会の地形〉を構成するのである。

このような意味で、近代以前の都市は、さまざまな社会的形象を媒介にして、都市という全域的な形象を与えられているといえることができる。社会的形象は、シンボル（象徴記号）として、都市をひとつの「全体」として形象化するのである。シンボルを媒介として、交通・媒介の位相という〈場を占めぬもの〉である都市の〈起源〉と、社会的に生きられた共同体的な同一性とは結びつけられ、都市はひとつの全体として現れる。シンボルを媒介としてひとつの全体性を持った共同体として生きられる。近代以前の都市のそのようなあり方は、『アレゴリー』のなかで、「シンボリック」なあり方であると指摘される（『アレゴリー』136頁）。この「シンボリック」なものとしての都市あり方は、常に外部へと開かれていく都市の〈起源〉としての交通・媒介の位相に、シンボルという社会的形象を通して、共同体的な同一性を付与する機制・論理である。この機制・論理は、外部に開かれることによって常に間一共同体的に広がり続けていく交通・媒介の位相を、統一的な「全体」へと「抑圧」していると捉えることもできる（『アレゴリー』322頁）。だが、近代化と呼ばれる社会の劇的な変化とともに、都市の交通・媒介の位相を土地空間上の共同体的同一性へと結びつける「シンボリック」な機制・論理も大きく変化していくことになる。そこで、近代化という文脈から、近代以降の都市においてそのあり方を支えている機制・論理が記述されることになる。

社会的空間の編成という点から捉えるならば、近代化とは、資本制の展開に伴って、共同体間における交通・媒介のネットワークが、物質的にも、理念的・創造的にも、そして遂行的にも、より巨大でネットワークへと変貌し、そのなかを流通するひとびと・物財・情報の量、そして流通するスピードが加速度的に増加していくプロセスだといえることができる。こうした近代化のなかで、まず鉄道というかたちで出現し、自動車、飛行機と発展していった高速交通メディア、あるいは電信、電話、無線と発展を続けていった通信メディア。こうしたコミュニケーション・メディアの発展は、まさに共同体間における交通・媒介のネットワークの規模をその範囲と速度において拡大していくものであった。近代化は、交通・媒介のネットワークをその規模において拡大するだけではない。そのなかでのひとびと・物財・情報を迅速に流通させるため、ネットワークは質的にもその均質性・抽象性を高めていく。こうして、交通・媒介の位相としてのネットワークの空間は、巨大で均質的な連続空間へと変容していく。『比較社会学』のなかで引かれている、夏目漱石の小説『三四郎』の主人公、小川三四郎が、東京駅にはじめて降り立った時に眼にし、それに対する驚愕を隠せないでいる近代都市東京の姿こそ、この巨大で均質的な交通・媒介の位相を浮上させた都市の姿なのである（『比較社会学』154頁）。

近代化のなかで巨大で均質的な連続空間として現れた交通・媒介の位相は、近代以前の都市のあり方がそうであったように、諸身体によって織りなされた社会性・共同性の次元へと折り返され、〈社会の地形〉として土地空間上の共同体的同一性へと完全に結びつけら

れることはもはやない。都市は、その交通・媒介としての位相を、土地空間上に社会的なものとして結びつけることなく顕在化させ、共同体的な同一性を獲得することなく「共異体＝共移体」として様相を呈するようになる（『アレゴリー』112-113頁）。

共異体＝共移体としての様相が顕在化するということは、都市の交通・媒介の位相が、近代以前のように都市を統一的な全体として形象化する共同体的な基盤が無効化し、都市は全体として形象化されえない断片的なものとして現れるということである。こうして、共同体的な基盤に支えられてひとつの全体的な形象へと結びつけられていた交通・媒介の位相は、共異体＝共移体としての様相の浮上にともない、巨大で均質的な連続空間としての顕在化し、都市は形象としての全体性を解体させた断片的なものとして現れる。こうした様相における都市の経験こそ、この冒頭で引いた、著者自身と著者が『比較社会学』のなかで引いたマンガの主人公が感覚していた、リアルさとその消失、身近さと疎遠さという相反する感覚が共存する都市のリアリティの根底にある、身体が社会に住み込むモードなのである。

資本制における巨大で均質的な連続空間としての交通・媒介の位相の顕在化。都市の共同性の無効化による共異体＝共移体としての様相の浮上。都市に統一的全体性を付与していた社会的協同連関の無効化による都市の断片化。近代化が引き起こしたこうした状況のなか、シンボリックなあり方をしていた都市は、「アレゴリーの」なあり方へと変容する。アレゴリーとは「全体的な連関や一体性を欠いた世界における表象の形式」である（『アレゴリー』28頁）。アレゴリー的なあり方において、都市は全体的な形象を欠いた断片的なものの集積として現れる。『アレゴリー』という書物では、統計や都市を扱った写真・小説、社会学や地理学の言説、都市景観やポストモダン建築といったさまざまな実践が、このアレゴリーとしての都市のあり方といかに関わっているかが詳細に記述されていく。

以上、『アレゴリー』と『比較社会学』を貫く、著者の「都市のあり方をめぐる思考」の道筋を辿ってきた。著者の議論は、最初に指摘したように、「都市はいかなるものであるのか」を問うのではなく、「都市はなぜ都市であるのか」を問い、そうした都市という存在を成立させている社会的な論理や機制を、その存在の深層的な構造との関わりで明らかにしていく点で非常に重要な示唆を含むものであるといえるだろう。こうした試みは、都市という存在を前提としたうえでその存在の定義を試みながら都市の歴史的・社会的多様性の前で挫折して行かざるを得なかった従来の都市社会学や都市論に対し、都市という存在そのものを支えている機制や論理を問うという新たな視点を指し示し、それによって都市論に新たな地平を開いたといえるだろう。

さらに、都市の（起源）としての交通・媒体の位相を指摘している点は重要である。つまり、都市はその（起源）において既にメディア的システムとしての様相をその内部に孕んでいたという指摘は、今日のコンピューター・ネットワークや電子メディアの状況をふ

まえて「メディア都市・サイバー都市の出現」などと軽々しく口にしてしまう議論に対して一定の留保を与えるものであろう（『比較社会学』206-209頁）。あるいは、一昔前に——いや、「現在も」というべきか——現代都市論の常套句として繰り返された「見えない都市」「全体化する都市」などのテーマにも熟考を求めるものであろう。その（起源）において交通・媒介の位相である都市は、「メディア都市」だったのであるし、一次的には土地空間上に〈場を占めぬ＝語られぬ〉不可視な存在なのだ。そうした交通・媒介の位相の「顕在化」を「メディア都市・サイバー都市」「見えない都市」「全体化する都市」などと語ってしまうこと、そのことこそ、現代における都市のあり方を示すものとして分析しなければならない、ということこそこれら二冊の書物を貫く思考は示唆してくれる。

評者は著者の「社会のなかにおける都市のあり方をめぐる思考」の基本線には同意できるし、示唆されるところが少なくなかった。このことを示した上で、最後に二点ほど評者が感じた疑問点を述べておきたい。

第一の点は、近代以降の都市のあり方の議論において都市の断片化という側面を強調しすぎているのではないかという点。たしかに、資本主義が高度に展開した現代社会においては、共同体を支えていた社会的協同連関の作用が無効化し、共異体＝共移体という様相が前面化する。この流れのなかで、統一的な全体として形象化された都市のあり方は解体し、決して全域的に形象化されえない断片的なものとして都市が現れる。この論理は非常に説得的であると思うし、著者が断片的なものとしての都市の様相として引いてくるさまざまな事例も説得的である。しかし、ここでSF映画、たとえばリドリー・スコット監督の『ブレード・ランナー』[1982年]における2019年の未来都市ロサンゼルスイメージを考えてみよう。あの端的にポストモダンな都市のイメージは、都市の断片的なあり方の映像表現であろう。しかし、あの都市のイメージは、「未来都市のステレオタイプ」として後発の数々の映画のなかで使われ続けている（たとえば、テリー・ギリアム監督の『未来世紀ブラジル』[1985年]や『12モンキーズ』[1995年]など）。未来都市のステレオタイプ化は「断片的なイメージの都市」として都市をひとつの全体として了解可能にするような営みと表裏一体になっている面があるのではないか。著者が引いている都市郊外のニュータウンの風景についても同じことがいえまいだろうか（『アレゴリー』266-270頁）。著者は、この例を、工業化＝商品化された記号や意匠が都市のグローバルな交換・媒介の位相において流通することで浮上する景観として論じる。「工業化＝商品化された記号や意匠」が断片的なイメージとして統一性を欠いたまま生み出される風景として存在しているという議論は納得できる。しかし、都市郊外のニュータウンの風景を「断片的なイメージが生み出す統一性を欠いた風景」として「統一的」に捉えようとしていることも見逃せないように思うのだ。評者には、都市の断片化という事態は、「断片的な都市」という全体化の可能性を孕みながら展開しているように見える。外部へと開かれ続け、安定的な像を結ばないがゆえに感覚されるような「不安」（著者もそうした自分が感覚するそうした

「不安」を表明していたはずだ)。そうした不安を、外部への開放を何らかのかたちで「抑圧」することで回避しようとする無意識の領域が存在するように思われる。都市の断片化がもう一方で孕む全体化の可能性も、そうした抑圧による不安の回避という意味で、身体によって都市が住み込まれるモードにとって重要な様相なのではないだろうか。

第二点は、著者が近代以降の都市のあり方を示す際に導入する「共異体＝共移体」「アレゴリー」という「概念」である。これらは、都市のあり方が、社会的協同連関に基づいて共同体としての同一性を持ちえなくなった、あるいは都市を統一的な全体として形象化しえなくなったあり方を示す「概念」として導入される。しかし、こうしたあり方を「共異体＝共移体」や「アレゴリー」という「概念」で名付けてしまうこと自体、「共異体＝共移体」や「アレゴリー」としてひとつの全体的な形象を持ちえない都市のあり方に、「共異体＝共移体」や「アレゴリー」という安定した形象を与えてしまうことにはならないだろうか。いうなれば、「共異体＝共移体」的なあり方をする都市を「共異体＝共移体」という「概念」によって「共同体」的に想像・構想し、「アレゴリー」的なあり方をする都市を「アレゴリー」という「概念」を「シンボル」にして全体的な形象として捉えてしまうことにはならないか。「共異体＝共移体」、あるいは「アレゴリー」として表現されていた都市のあり方は、そのあり方を「概念」として記述するべきではなく、おそらく、常に外部への開放されることによって安定した形象を与えることに挫折し続ける「過程」として記述するべきなのではないだろうか。第一の疑問点との関連というなら、著者が近代以降の都市のあり方を「共異体＝共移体」、あるいは「アレゴリー」という「概念」によって表現していることそれ自体が、常に外部へと開かれていたがゆえに安定した形象へと回収されることを求め続ける、身体によって都市が住み込まれるモードの現代的様相を示しているのかもしれない。

著者自身は、自分の仕事を「その時々思考の過程と形を記録するもの」(『比較社会学』235頁)といっている。とはいえ、著者の都市のあり方をめぐる思考は、先にも述べたが、従来の都市論に対してその前提自体を問い直す視点を突きつけると同時に、現在の都市論に対しても自らの都市認識自体の再考を迫る論点を提出する。そのような意味で、著者の思考の過程と形の記録が、読者自身の「都市に関する思考」に新たな次元を開く知的刺激に富むものであることは間違いない。実際、評者がここで提出したふたつの疑問点こそ、著者の思考の基本線をつまえた上で、その議論自体に触発されて評者の「都市に関する思考」を再考しながら提出したものなのだから。

(きくち あきひろ／フェリス女学院大学)